ー役員エッセイー

大通公園を望む窓辺から

オンライン診療が超えるべきハードル

副会長　藤原　秀俊

毎朝７時10分頃には出勤し、院内・院外メールの確認と返事を書き、その後当日予約受診患者さんのチェックを行う事が毎朝のルーチーンになっている。月～金の午前診療の一コマを担当しているが、概ね40人～50人程度予約に入っている。１人１人を電カルで確認すると、６割程度の患者さんの顔と病状・家族構成・職業が思い浮かぶ。４割程度の方は、どうしても思い出せない。当然病状も患者さんの周囲の状況も思い浮かばない。対面の時間や数が少ないと記憶が薄くなる。そのため、通院回数が少ない方、長期処方の方がまだ私の永久記憶の中に入っていないようだ。

診察の前には、待合室で待っている時の姿勢や同伴者との距離感、ご家族との親密度、他の患者さんとの会話の状況、椅子から立ち上がる時の立ち上がり方や同伴者や介助者との関係（親密さや信頼関係）、本人の顔の表情でその日の気分がうかがい知れる。診察室までの間には、歩行状態・まひの状態、杖や歩行器の使用状況、歩行時に苦痛はないか等を知る事が出来る。当然診察中には、通常診察を行う。

平成30年度診療報酬の改定で、オンライン診療が可能になった。当然離島やへき地に限られるものと思っていたが、「便利だから」「受診の時間がないから」「対面は恥ずかしいから」等の理由で、オンライン診療を望む人たちもいる。またオンライン診療で一儲けしようとしている輩もいる。

前述のように、対面診療には多くの利点があり診療に役立つ情報も豊富である。離島やへき地であっても、オンラインのみでは情報量はかなり少ないが、今後は推進すべきだろう。これらは、オンライン診療とは言わず、遠隔（地）診療と呼ぶべきもので、後者のような場合と分けて考えるべきではないか。

北のウォール街にたたずむ市立小樽美術館

理　事　阿久津光之

小樽を訪れ運河方向に足を向けると、2016年にできたニトリ小樽芸術村が目に入ってきます。旧三井銀行小樽支店、旧北海道拓殖銀行小樽支店のほか２棟に小樽市が隆盛を誇った19世紀末から20世紀初頭の美術品や工芸品を展示した美術館となっており、小樽市の新たな観光スポットとなっております。観光客には展示品はもとより明治時代の銀行建築様式の素晴らしさを感じてもらっているようです。

さて、この近隣に目立ちはしませんが市立小樽美術館があり、常設展の中村善策と伊藤　正の作品が展示されております。小樽に洋画がもたらされた明治40年から多くの画家が育ち、その中でも写実系の絵画、特に風景画が隆盛し、その代表画家が中村善策であり、彼は「小樽は風景画家のために提供されているような街である」と語り、この街が風景画家を育てたとも言われております。中村はその生涯、故郷小樽の風景を愛し、帰省して描き続けたことで知られております。

中村善策は1967年に伊藤　正とともに「北海道一水会」を創設し、北海道画壇に大きな足跡を残しております。その伊藤　正は札幌出身ですが、伊藤　正の妻が小樽市医師会会員の姉であった縁があり、小樽市医師会には伊藤　正の一世を風靡した黒い線描による強靭な絵作りの「ノートルダム・ド・パリ」が寄贈され講堂に飾っております。伊藤　正は小樽に魅せられた一人であり小樽の風景画を多く描き、その代表作が1962年日展の特選に選ばれた「運河に沿う街」であり、モチーフとしての小樽運河が全国的に広まったと言われております。市立小樽美術館には善策張り（スケールの大きな構図と豊かな色彩）を特徴とする中村善策の作品と共に伊藤　正の運河の作品が展示されおり、方向性の異なる写実派の二人の作品を目にすることができます。会員の皆様には小樽に立ち寄った際にぜひ鑑賞していただきたいと思います。